

平成24年8月1日発行(毎月1回1日発行)
昭和49年10月15日第三種郵便物認可

2012
AUG
8

C

明日を創る医療総合誌

CLINIC

magazine

No. 518

[特集]

骨粗鬆症 治療最前線

〈OVERVIEW〉

これからの 骨粗鬆症治療戦略

鳥取大学 萩野 浩氏

- ・新規薬剤の特徴と使い方
- ・骨粗鬆症と動脈硬化

地域医療フロントライン①

大阪府医療人キャリアセンターの挑戦

漢方

診察ファイル 第25回

漢方学習の手引き2



慶應義塾大学医学部
漢方医学センター
渡辺賢治

はじめに

本シリーズで、昨年8月に初学者向けの漢方の学習方法について書いた。まずは漢方をお使いでない先生にも使ってもらうということを趣旨としていたが、最近では漢方を使う医師はどんどん増えていて、医師の9割が日常診療で用いている、というデータが出てきている。

今回はその漢方医学的思考の1つである「方意」について記す。

壁に当たった時に、漢方医学的思考方をしよう、と書いた。

今回はその漢方医学的思考の1つである「方意」について記す。

日本漢方の真髄 方意

中国の中医学と日本漢方との大きな違いの1つは、中医学が生薬単位のオーダーメイドなのに対し、日本の漢方は処方単位である。

たとえば葛根湯は葛根、麻黄、桂枝、芍薬、大棗、甘草、生姜の7つの生薬から成る。中医学では病人を診断したうえで、葛根湯を処方するにしても、生薬の量を個人個人加減する。また、そこに生薬を加えたり引いたり、という生薬単位のオーダーメイドなのである。しかし、処方単位である日本漢方は「葛根湯」という処方の形を崩さない（ただし、『傷寒論』に記載された生薬量の単位について解釈が異なるため、医療用漢方製剤の場合、メーカーによって量が異なる）。

そうした処方単位を重んじる日本漢方の方法は、「葛根湯」がどのような人にいいか、ということを事細かに検討してきた。すなわち「葛根湯」という処方から見て、どのような人に適応があるかなどの検討を行ってきたのである。

昭和の漢方の巨人であり、現代漢方の礎を築いた大塚敬節、矢数道明らの論文を見ると、ある漢方薬がある疾患に対して使ってみて、どのよ

うな人にその漢方薬が効果があるのかを検証し、漢方の診断である「証」を精緻なものにしてきたことがわかる。人間の見立てである証はそのまま治療方針になるのが漢方の特徴である。これを診断（証）と治療（方）が一体であるという意味の「方証相対」という（図1）。

漢方薬の性質を知ろう

今回は漢方薬の中身を知ろうということも記したが、中身を見ることで、その漢方薬の持つ性質がわかる。漢方の勉強を進めるうえで、処方を持つ性質を知ることが重要である。

1) まずは温める漢方薬と冷やす漢方薬を知ろう

漢方の診断に「寒熱」がある。その人が「寒」であれば、体が冷えていることを意味する。代謝が落ちている場合もあるし、血流が落ちている場合もある。寒であれば温める漢方薬が必要になる。その代表は附子（トリカブト）と乾姜である。附子は高齢者で代謝が落ちて全身が冷えるような場合に適応になる。附子を含む代表的な漢方薬である八味地黄丸、真武湯はいずれも高齢者に処方することが多い薬である。

逆に熱証の人には冷やす漢方薬が必要になる。黄連・黄柏は冷やす生薬の代表であり、黄連解毒湯がそれらを含む処方になる。黄連解毒湯が効く人は熱証で、イメージとして

表1 温める漢方薬と冷やす漢方薬

作用	主な生薬	漢方薬
温める漢方薬	附子を含む漢方薬	真武湯
		八味地黄丸
		牛車腎気丸
		桂枝加朮附湯
	乾姜を含む漢方薬	人参湯
		大建中湯
冷やす漢方薬	黄連・黄柏を含む漢方薬	黄連解毒湯
		三黄瀉心湯
	石膏を含む漢方薬	白虎加人参湯
		越婢加朮湯

は、いつも扇子を持っていて、赤ら顔で汗だくになっているような体力のある人である。また、石膏も冷やす生薬の代表であるが、越婢加朮湯は関節炎などで炎症反応が強い場合やアトピー性皮膚炎で発赤が強い場合などに用いられる。白虎加人参湯は熱で口渇が強く、身のおきどころがないような感じがする時に適応になる。

表1にそれらを含む代表的な漢方薬を挙げる。

2) 補瀉の漢方薬を知ろう

漢方の治療法には補瀉（ほしゃ）という考え方がある。不足している時には補い、過剰な時にはそれらを体外に出す、という考え方である。

体力が不足している場合に使うのが補劑である。補劑の代表的処方には人参・黄耆の入った処方である。別名參耆劑（じんぎざい）とも呼ばれる。代表的な漢方薬としては補中益氣湯、十全大補湯、人参養榮湯で

ある。これらは「補劑」の代表としてよく挙げられる。補中益氣湯は氣（生命のエネルギー）が不足している気虚に用いられる処方であり、気虚に加えて血液の運ぶ栄養分が不足した場合の血虚が加わると十全大補湯になる。

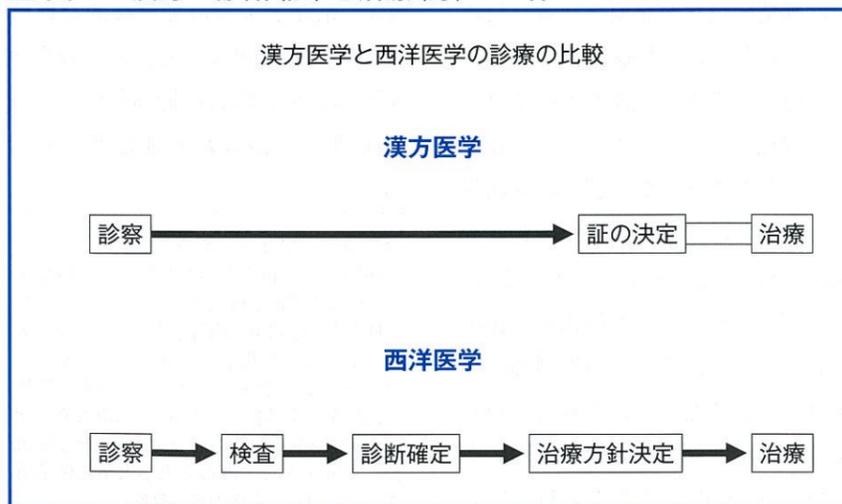
逆に「瀉す」場合には体内の毒物を汗、尿、便などから出させる。江戸時代には吐かせる方法も行われたが、現代では行われない。

インフルエンザなどで汗を出させる薬の代表が葛根湯・麻黄湯である。また、便通をつける漢方薬も代表的な瀉劑である。大黄（だいおう）・芒硝（ぼうしょう）が代表的な漢方薬である。

漢方薬どうしの関連を覚えよう (表2)

漢方薬の名前を見ていると、よく似た名前があるのに気付く。たとえば四君子湯と六君子湯である。さら

図1 漢方は診断(証)と治療(方)が一体



■ 表2 漢方処方群

漢方処方群	漢方薬	構成
人参湯（四君子湯）類	人参湯	人参湯をベースにする
	四君子湯	
	六君子湯	
	補中益気湯	
建中湯類	桂枝加芍薬湯	桂枝加芍薬湯をベースにする
	小建中湯	
	黄耆建中湯	
	当帰建中湯	
四物湯類	四物湯	四物湯をベースにする
	温清飲	
	芎帰膠艾湯	
	温経湯	
	当帰芍薬散	五苓散と四物湯を併せ持つ
柴胡湯類	大柴胡湯	柴胡・黄芩が入る
	柴胡加竜骨牡蛎湯	
	四逆散	
	小柴胡湯	
	柴胡桂枝湯	
	柴胡桂枝乾姜湯	
承気湯類	大承気湯	大黄（芒硝）が入る
	桃核承気湯	
	大黄甘草湯	
	三黄瀉心湯	

に人参湯と関連付けて覚えるとよい。

人参湯の乾姜を生姜に変え、茯苓と大棗が加わったものが四君子湯であり、さらに陳皮・半夏の2つが加わることで六君子湯になる。また、補中益気湯は四君子湯が骨格になっている漢方薬である。

建中湯類も同様である。桂枝湯の芍薬が増えることで桂枝加芍薬湯に

なり、それに膠飴（こうい）が加わることで小建中湯になる。さらに黄耆が加わると黄耆建中湯になる。ちなみに小建中湯と大建中湯は名前が似ているが、全く別物である。

同じ仲間の漢方薬は同じような性質を持つ。たとえば四君子湯類は胃に働く処方である。建中湯類は腸に働く処方である。

四物湯は血虚の代表的な薬であ

る。血虚は上述したが、血液が運ぶ栄養分が不足することにより、皮膚の乾燥、爪の変形、脱毛などが見られる。その他、こむら返りや貧血などの症状が含まれる。四物湯に黄連解毒湯を加えると温清飲になるが、アトピー性皮膚炎で熱がこもったようになっていて表面の発赤は激しくなく、乾燥した肌の場合に用いられる。芎帰膠艾湯は不正出血や痔出血などを止める目的で用いられるが、出血量が多いと貧血になるため、四物湯と関連するのである。当帰芍薬散は四物湯の地黄を去り、五苓散の猪苓と桂枝を去ったものが合わさったものである。血虚症状と水毒症状を合わせ持つ者に用いられる。婦人科三大処方の1つである。

温経湯も婦人科系に用いられることが多く、更年期障害や不妊症などに用いられる。

柴胡剤は大柴胡湯、小柴胡湯などの類であるが、表2は実証から虚証への順序となっている。柴胡剤は傷寒論では少陽病期（急性熱性病の第2ステージ）の薬であるが、慢性疾患にも応用され、免疫を調整し、ストレスを軽減する目的で用いられる。

このように基本的な処方からの派生で覚えておくと、どの処方とどの処方が関連しているかが整理される。詳しくは日本東洋医学会編『学生のための漢方医学テキスト』を参照いただきたい。

次号テーマ「円形脱毛症」(荒浪暁彦氏)